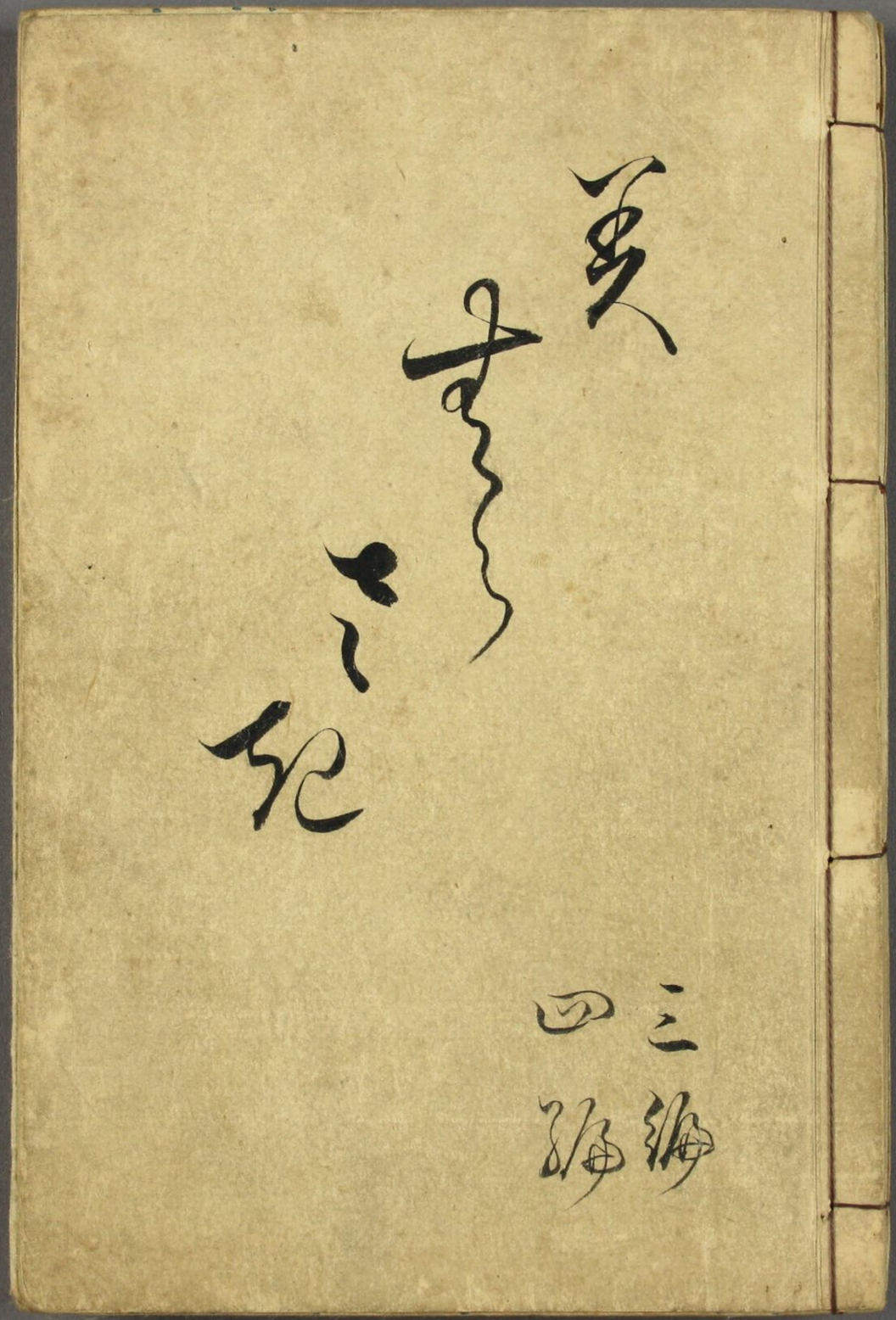


三編上

玉鶴堂梓

笠亭仙果作

梅蝶樓國貞画

根源實紫 三編上

喜鶴堂壽梓

丸善文庫

実世界の実ぐう摘が此公式部い藤原為時女兄ゆも勝
て文学ゐ頭敏諸藝ゐ達し情ふく篤実温行の賢
婦ゐ右衛門権佐宣孝ゐ嫁し大貳三位越後弁の二女
と産宣孝早物故とけれ京極の家ゐ寡居し後上東門
院の中宮ぢ臣ぬよう宮仕し白氏文集の楽府ゐ教まわら世左雀つとう
以るさざみのゐ日本紀局と綽名つけられ又御堂殿の懸想しまへ
るとさのよく脱まて夏名と此ず当時婦女の凡俗遥猥しかし
中に貞操正しく後家立ご垂夏ゐ一生と送しまそゆく筆
と善悪新条と岩越と歸けるよと夫の学もゐ勲と洽歎
しとの虚譚と石山ゐ源氏と作初女源の罪ゐ地獄ゐ墮
しと証説とのるとこれらの外ゐ記をとる假令日記の本文を
そのまく遺漏む少しとも西編ゐ足ざるべし当世殺編も
長く續くと主ともれが此人源氏を作げる時種ゐれしと思い
実説先輩一ゐ度殺の事ゐ重ぐ人数殺の御伽

過失させたまふ前後のさる桐壺の更衣の准拠ゐ必是と童蒙ゆも
知せまほしさの筆序掛巻も可畏き
華山法皇の御一代記二三帙ゐ及ぞうるゐ栄花の浦くの別ゐ須
磨明石の面影あれゐ式部と宣孝ゐ逸せて後又二帙ゐ伊周公の流
罪のおくうも虚誕ぢゐ演義しそ次々作べ叔此編ゐ画面もあらびて
紫の本色と損ぐたれど始終佛まづき今すこたるゐ妻幸計ゐ戯作
のあるぞうまふ似ぐまべ紫の同色とも四天ゐ柱そ耶素軸とゐ立者強
盗かるぎ歩しぐ戯作の花ハテ花ゐ開ねが実いるとゐ如こそ
○大鮮蝶のゐ日本紀男客ゐ載れど阿闍梨の行り以下皆根なし話ゐり
○道兼主の扇のゐ砂石まゐ変ゐ保浦の幻術又巌久の愛童奇童
九のゐんごゐふおとうもるき空言ゐそ実ゐ女神の別し逸しこと
ゐさる心ゐ宝祚をとそて花山ゐ新離髪せさせのこ栄花物語ゐ本文へ

癸丑春

笠亭仙果識

大斎院選子内親王
侍女少将
豊国画

中将の局
式部丞惟規

二人のつき
○ 其ばんのよる

馬寮かの下司おほ
小山田ざえもの畦豆まるとゆるのつぶ
てをみつほうしをのけーさらとあるけれど
あくびそるばつろちまをくやーちげんと
きるとしとまりがてしとれかりをもーん
たくりのこだひまりがりのひまー
ゆうぬきこだてうくらものこさ
とうくらものこさ
ちくらをさをもちんうんとうもそむ
うそぐりおんれとなおみたらいん月元のてー
ゆこうけくる女いうを
きれこちかうさ

つぎへ

芥根水

つぎはきりぎりすの
がのみのあるせつき
とをぞさびしきのそふ
ひとをまちまんぐたろうふ
ゆそもうぐいすこうたまへとそのがか
そうとをたげすやりがそうとへ
よるひそかにかりうきすりもりくも
うまは女かぎーおねいるやのたの
それてあろもきうあよのあで
それいるまおいるまへとそそこと
りひつうぐりふうろうちり
ひそまとそでいろうろまま
きそわるもをのひそろをのよまぐ
さまうとの父でとろわきき
せのうあのやきつたぬさ
るとふたぶろうそれいせまするかとさま
ぐうゆもをそをきかすなるまおいるこる
みちおーんからうあうおもよりへ
たとえんとのうちくのみの
おとうひいともかくもそれね◇

◇あ
てつつこも
るん人をろ
こおところきせて
のまうせる
日も
へぞ
しそ
んとの
てかかる
こそよおお
かをわと
つとろとのゆくもまるまうまれば［二のまき］

うるおーの
人びとあのおろて
ろとこれがかを
てめうをあのもあげ
きろおたんひうのの
うぬうおやとーくる
ぬきのそちうとうけ
それいおまぐうほまのう
「そてもうひさよのそうへ
あれもうんめつきこのとうへ
れのみづのあとときそえうきまを
うせとのあれが［ゆうべ］をそれて
るまきのうぐあのれうちあめでやるお妙それぐを［つぎ又］

［一ろうつき］おまのぐこれうとうの
ころねうとこそそこころ
たる女のぐぐ［一］

鬼

效

資子内親王　従二位鏡子
侍従相中　慶滋保胤
四品盛明親王

さてなほものがたりのつづきかきつぐべし。

ゑまつぶり
かとふかやひしくまつふ
さゝぐれのあるころの日
かのてらみやどりまつ
ちろとろへ
しきあのあるじ

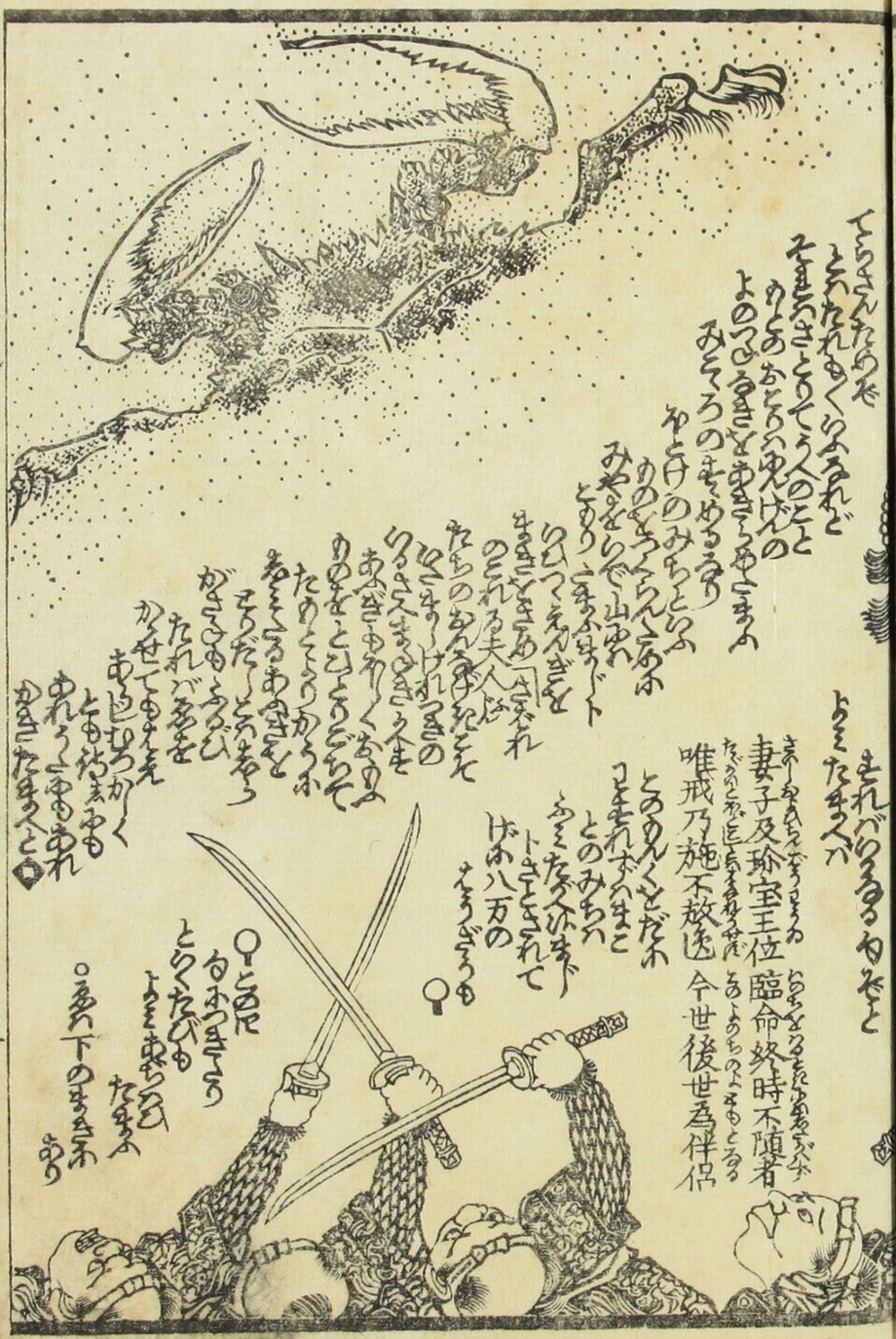
なまつぶりたゝくとかふかやけのくちばしとるくそのおやしてこれらふたまものさゝぐれのあるころの日かのてらみやどりまつちろとろへ
ひげやまへとかるうけるこのさゝぐれあるふかかれるくやくしぎつのでやくをあくまのごきあぐらのさゝぐをおくまのつゝとも日ふまつてあけくるのうちくきみやとあくらんさらさるまやきふふおもつくくきうれもくとあまこそそぶ人のくまんともかをとまあり
うえんくぎのえうへぬりごめのせまくまをまうそひとうなもへぐるまふおるるあのふくちとるのようとびたとえん
しきあのあるじ

ものうくありのまゝすがたけるしきつ
ものゆえんせたゝきのものゆえんとれがとなせが上中下のひとまえぜあんうらやくそうの名たくさの風みちるねまもんもゝたゞれちらしそひとまゝあらうく
どんぐりとなまつぶりえんひとそさゝぐれのあるころの日かのてらみやどりまつけの一代きめづらしんのさゝぐれのまつぶりえんひとそ

[つぐき] みそろ
うくりそく
たびもろくへ
ろうかへたれも
あれどもあらたな
とゝあまさたのしく
十九ゆそかしく
おまうさをまのびりそ
あゝのくろしにおろしおみや
まそだんさくせんかりくまろ
大かとくのあすゞとろうへをと
ろんぎまうくまのゝふみろる
あゝて山のこおりおみや
づくのみそろりよのひとの
あまうしのろうくふあゞ
ろくをそひちやうやの
やくをあゝやよの
つきおさろく

◆ころをそてあざろう
さのくろるおそゞ
さろゞるおろう おさき
やくさんあろくたのり
の山ろりおまことふ
あまうそのかんん
ろうそれとみゞかくふ
さとさんふい大

集絶の
しにのそろう
要文
それ
とや
ひゞと
さろく
とりき
とり



それぐろるゆそと
ようたまへ

さまうゆそをそうろうろう
妻子及珍宝王位 臨命終時不随者
たゞのこおとそうそうろうれる
唯戒乃施不敢逃 今世後世為伴侶

とのゝんくとだふ
こまれおのまこ
とのみちの
ふくたゞひまゞ
トさとくれて
げふ八万の
さろぐろう

○このたゞ
ゆふきさろう
とろくたゞも
ようまれろうゞ
たまふ
○ろ下のまろふ
あり

松源實もくろく

自九編至十四編　笠亭仙果作
當辰正月發兌　歌川國貞画

九編　惟規少將再度中將の計ひ　曳手妙ひ其寛を救ふの　齋院御
楔の行啓ひ天変有正名鼠もち擒られて中將鳴高罪ひ伏す　惟規住吉へ
御使ひ立三島江口ひ遊女香炉ひ値遇し宝の笛を失ひ　篭居の事　十編　同人
密ひ北越へ出奔の紫式部めぐりおひてそれとなの歌北東の宣孝丹生
使の時亂村の狼藉避く六田の茅屋ひ旧熟の婦と一子ひ再會帰洛の後もうく
宇佐へ赴く　十編　六田の梭手児娘姑もとり野洲子病て身まかる鳴児姉の仇を復
さんとす紫式部一女子を産む後大貳三位賢子是なり此巻法皇みつからの話をとゝ
かく書収む　十二編　惟規北国流浪あるいは式部父女の忠貞ひ中やふ記し御堂殿小野宮殿
門院ひ宮仕の顛末　十三四編　式部父女の栄花と賢才をもて出んで花あり實ありの御高評を希ふ

花兄争陸奥名所　初ノ二ノ三ノ
同作國芳画

芝神明前
喜鶴堂敬白

下のまき十一丁目うらのまへつゞき

○そのころだいやふ中つゞきのみやうとうきゝまつまうねどもそれくうとのみやうぎたるそーようにつくとけもつかりて人やふたろやうこのことのなんさまかたちのたゞきまやふあのひとをやうにうらもとめてこゝろのまゝをきゝたるこゝろのまゝをきゝてくるふことまゝ

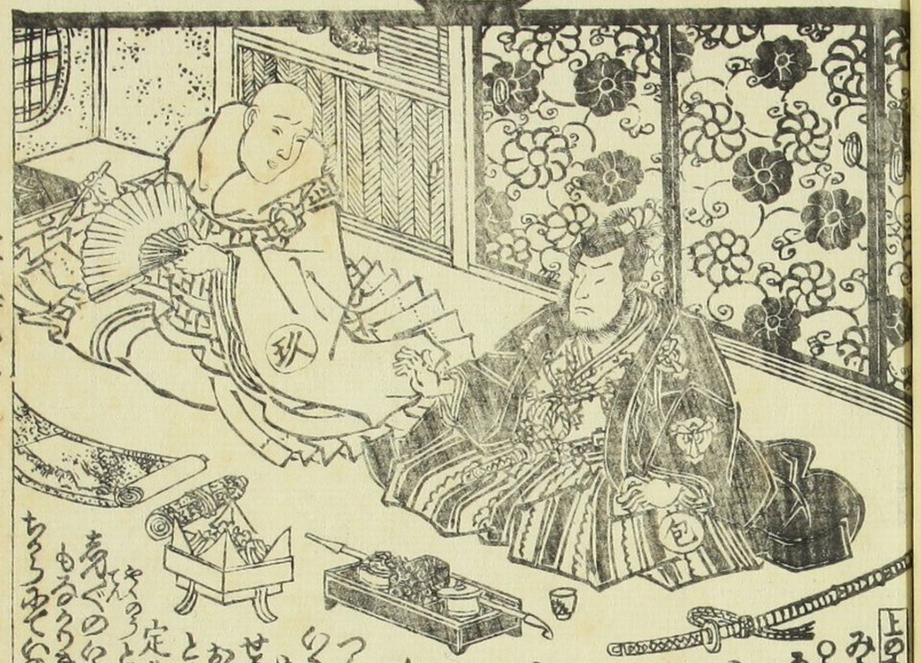
下のまきへつゞく

根原實もと実

仮果作

国貞画

三編下



上のまき
みどころ
うらのまき
つづき

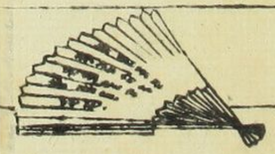
三編下

仙果作　国貞画

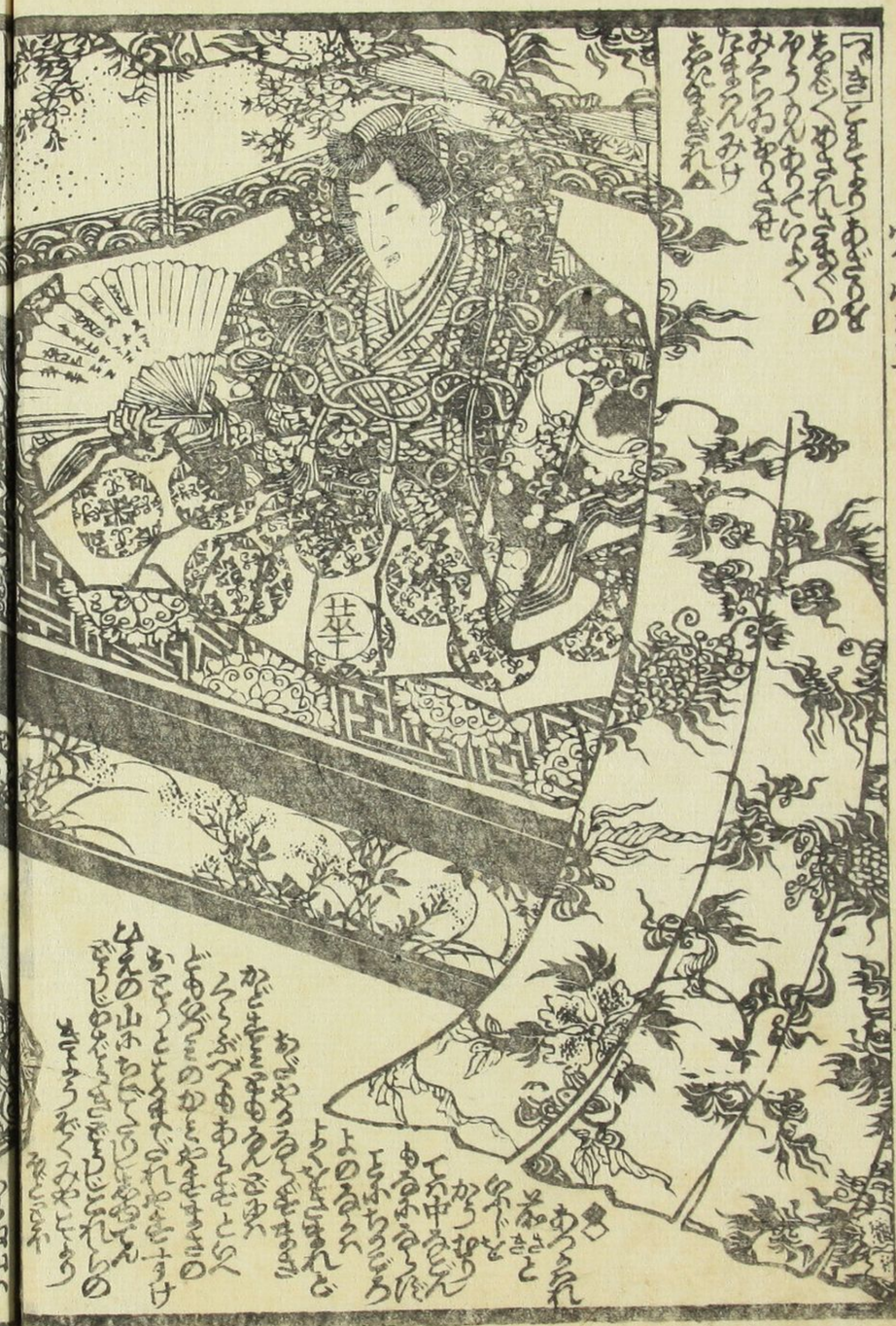
つゞき　そりやまたとよいなとゆつて
さそやくさきのせんあくん
今ことにけんぜふまくらのあとをまけんあいてをまをうと
まをまけばまをまをうずるまつそのごとくせんあくの
とをひとりれてごくらくふうまろくもあり
うくまぬのもありそのこれふのうりあるとていきかえれぬ
まをうまのこれらつるざこまをうまをとけのちりふまつてこれらあり
かつて
ときまをとそをゆーきとあやしもそうくも」
やとけのゆーめをうどとすまりものをうどとすそぐくあこそろくのよのきたうとうりこそをまうたしどころをやまんーあくーをさけつきごひどとらじどせふせをまをうる因ふんせとどせのまもたちとえんぐえもうる及をとけのきえけんとうんをゆきたろいわまりのところ

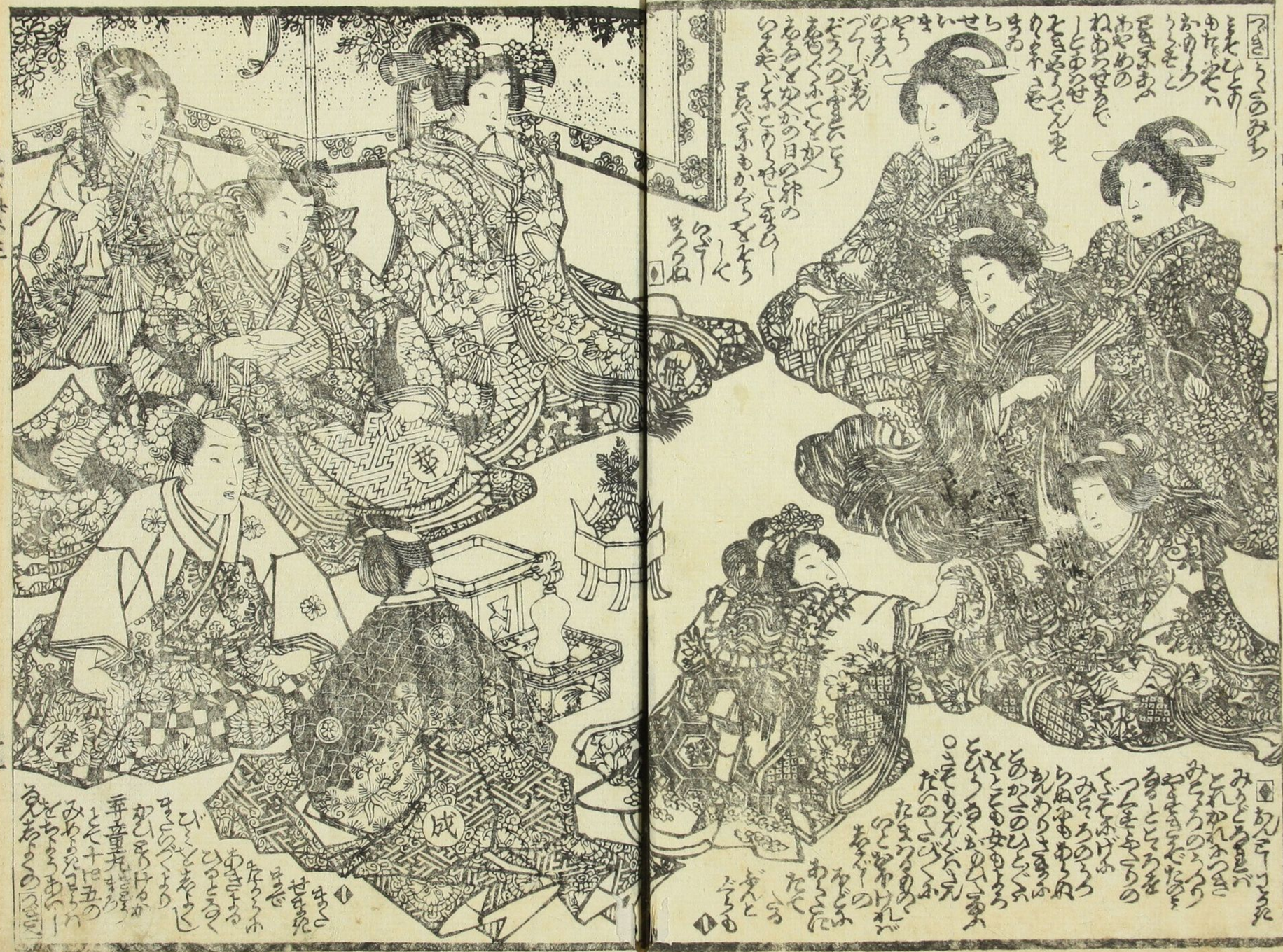
◉ととをとろ」さをよ
たつてちくーをたてさを
ふうまをとをねさをまをもの
やんのうしのおあこもの
とそぐんぐおぐうりかわ
さんたのー自ふ気級ち
ひさうゆて大ふ糸統ち
十七のまさかの妻ふ孫
ちやうのおうをさうろ
可ふーのこもなこと
せうろぎうとまやうのだう
ヤをつてをけんがのべん
せうとどうくうし
あまうこおりとそのとれや
うんこねこーのみの
あうりおわと
けのせうそうも
かんありけんと
みうどをとゆめ
ちやうまものの
めんくかんふ
たんぎずおき
のうをぞま
なびけり

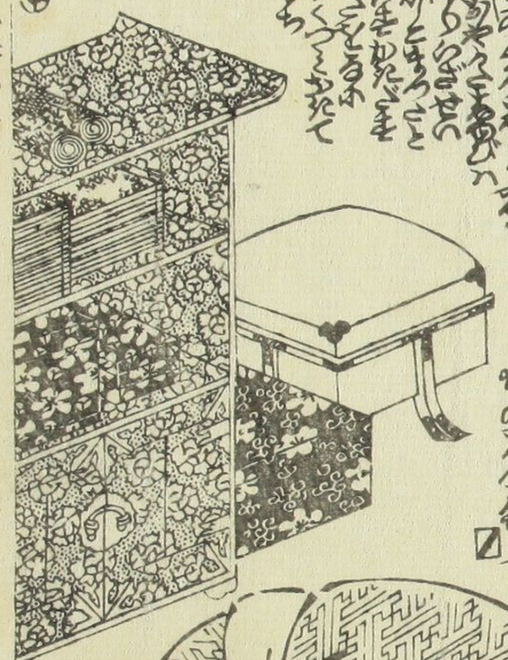
つゞき

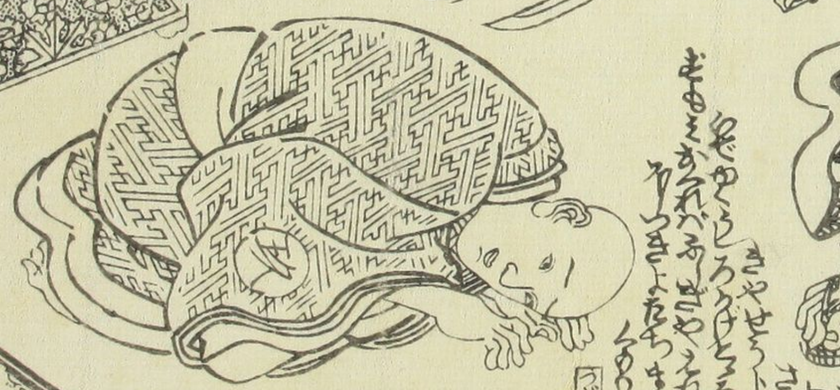


四
四


華







萃

娘庭訓金鶏　山東庵京山作　初編二編三編　梅蝶樓國貞画

おくみ総次郎琴聲美人録　同　十四編十五編十六編　立川齋國郷画

夢想兵衛勤學枕　笠亭仙果作　五編　大尾　一勇齋國芳画

新増補西國奇談　爲永春水作　三編四編五編　歌川國貞画

お七吉三松梅竹取物語　樂亭西馬作　初編二編　歌川國貞画

根源實紫　笠亭仙果作　十一編十二編　歌川國貞画

花兄弟陸奥名所　同作　初編　同画

東都地本繪草紙團扇問屋　芝神明前三島町角　佐野屋喜兵衛板

仙果作

清書　谷金川

國貞画

根源實義

四編上

實紫四編序　笠亭述

妻子珍宝及王位云云との貪慾の深き人と驚くべき金言なれど此草紙の御門の掬水受過られて他の迷惑野もとより彼方の物と生氣も疲せ位が好順合そ思ひ故人本町菴谷羽の院なれもおこも同下く主君も僮僕も皆裸体手巾一條糠袋外は身体漆物ら湯屋の比論が便是処人慾の垢を脱一石橋口と潜ると上ら御深窓さえ今利利も須臾も異らざりけの如是悟る則へ萬の宝蔵目前ゆあれ我揚る帆掛船仙洞様ら銭湯へちの教訓とそら人跡潤ゆ勿考ふべそ得ぬ扨ゆあらで筆管ハ久も変ら処重複られで唯ごらきの追風ら力漕安くゆ着も罷られぬせ処績物又一帙方絶のとそ時ら処汗とそもゆかくものゆ赤面るごら仙果とやもそ偏父でござい

癸丑新刊

根源實紫 四編上冊

笠亭仙果作

梅蝶樓國貞画

喜鶴堂版

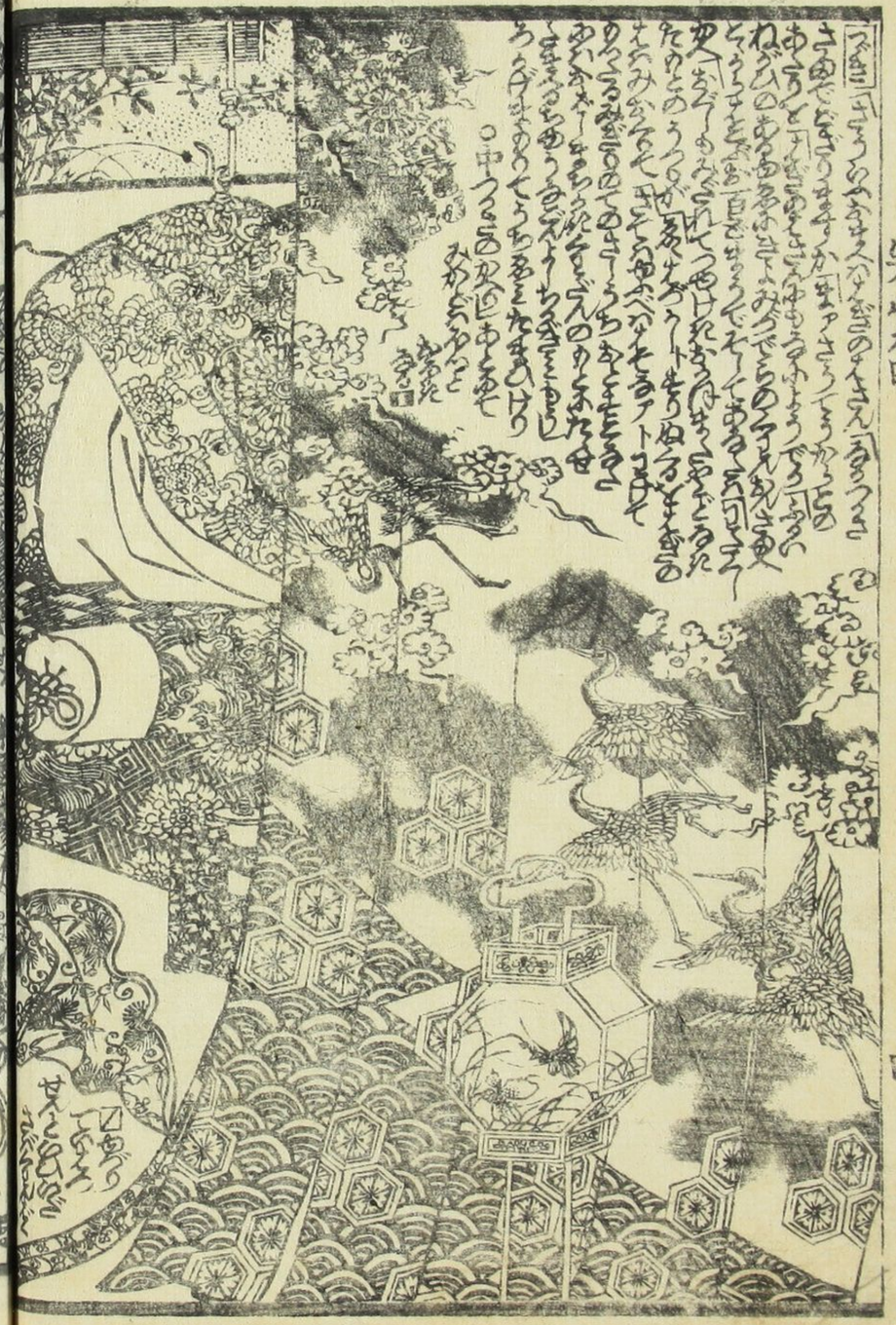
せつつのうら
摂津守
源頼光

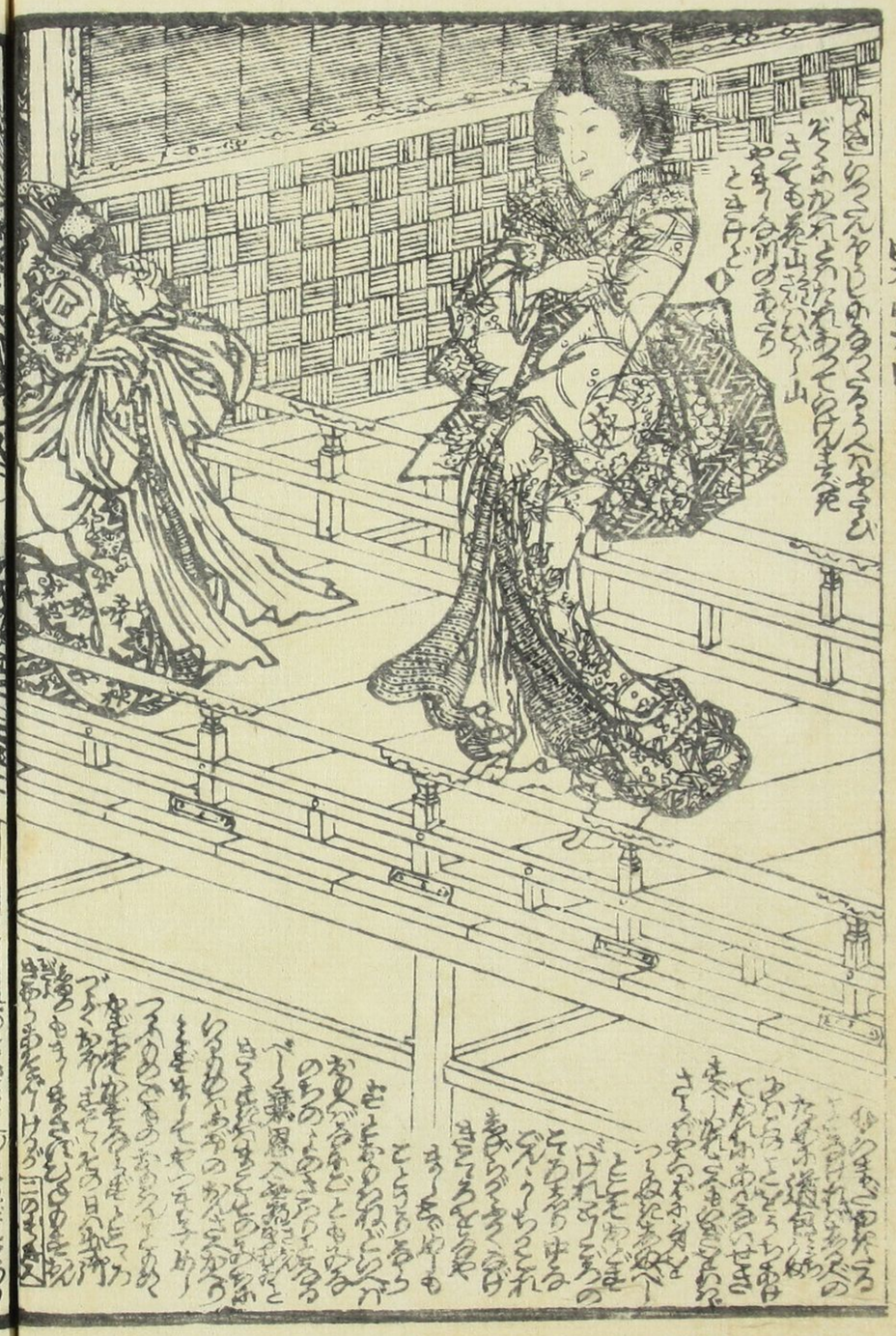
葛城山魔女
土蜘

袴垂保輔

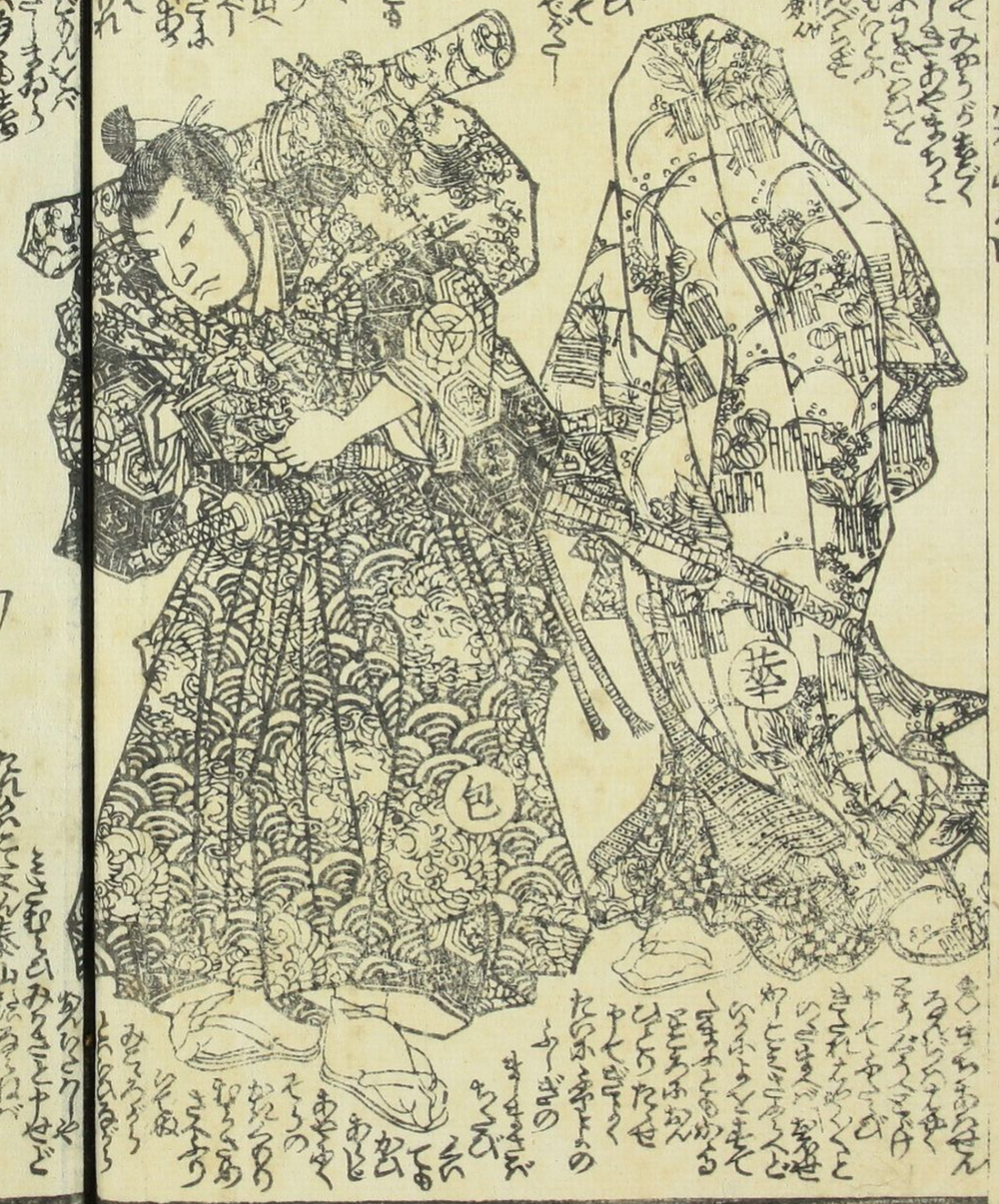
和泉守藤原保昌

市原野
葉童麻呂





まゑほん太平記
鳴神上人


包
幸

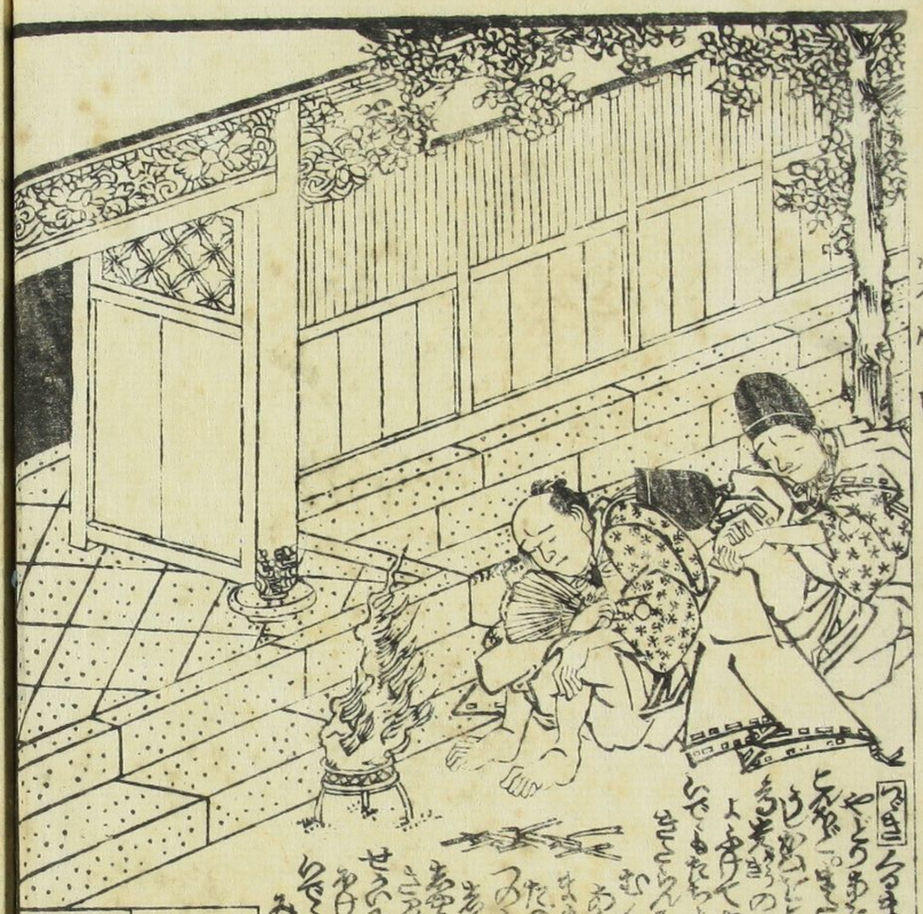
松源實記

自九編至十四編 笠亭仙果作
當辰正月發兌 歌川國貞画

九編 惟規少将再度中将ゞ針計ゟ船ー〜を曳手妙ゟ其寛ゞ救ふ○齋院御使ふ立三島江ロふ遊女香炉ふ値遇ー〜宝の笛を失ひ篭居の事 十編 同人
侯の行啓ゟ天変有正名ゞ揺られて中将鳴高罪ふ伏する○惟規住吉へ
密ゟ北越へ出奔○紫式部めぐりあひてそれとものゝ歌ゞ申來○宣孝丹生
侯の時亂村の狼藉避ゝ六田の茅屋ふ旧熟の婦と一子ふ再會帰洛の後ゟ
宇佐へ赴く 十編 六田の按手兒娵妬ゟ野洲子病て身まかる鳥兒姉の仇ゞ復
さんとす紫式部一女子ゞ産む後大貳三位賢子是ゟ此巻法皇おつむゞの話ー
かく書収む 十二編 惟規北国流浪あられること多ー紫式部寡婦ふゟ上東
門院ふ宮仕の顛末 十三四編 式部父ゟの忠貞ー御堂殿小野宮殿
の栄花と賢才をすゝ出ゞ花あり實ゟり御高評を希ふ

花兄弟陸奥名所 初ん二ん三ん

同作國芳画
芝神明前
喜鶴堂敬白



仙果作
國貞画

つゞきハ〜るまゝにゟゝほゝこゝろのうちんあんのきやうあをゝ〜ゞきこれ
ゟ〜ゝきこゝろ〜ゝとうしゝゟ〜ゝきこゝろ〜ゝとうしゝゟ〜ゝきこゝろ〜ゝとうしゝ

仙果作

四編下

外題出figure国画

玄鶴堂芳兒

さの屋板
笑
門
竹馬
平編下冊
仙果作
國貞画

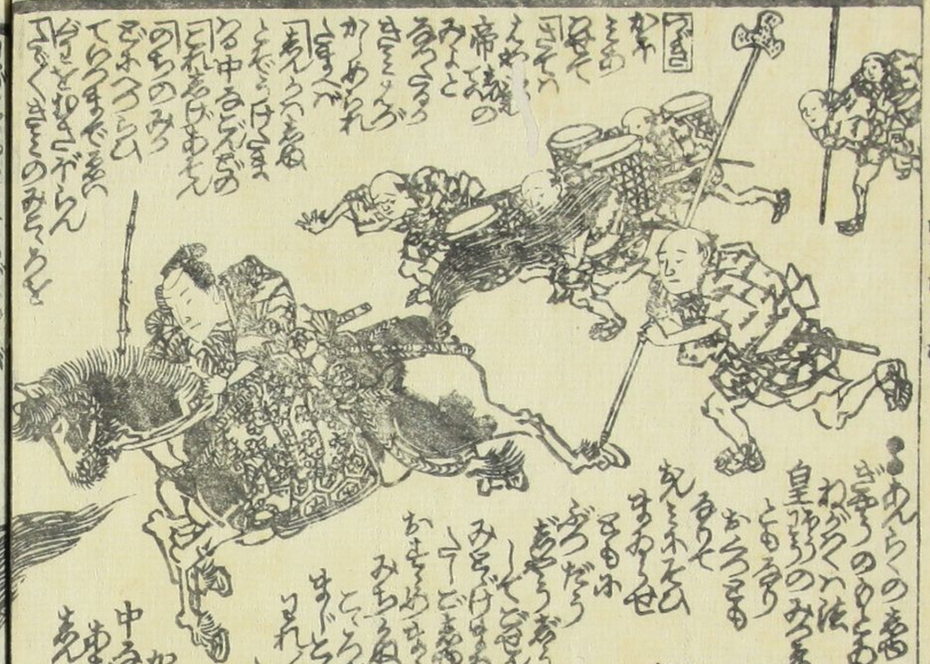
雨

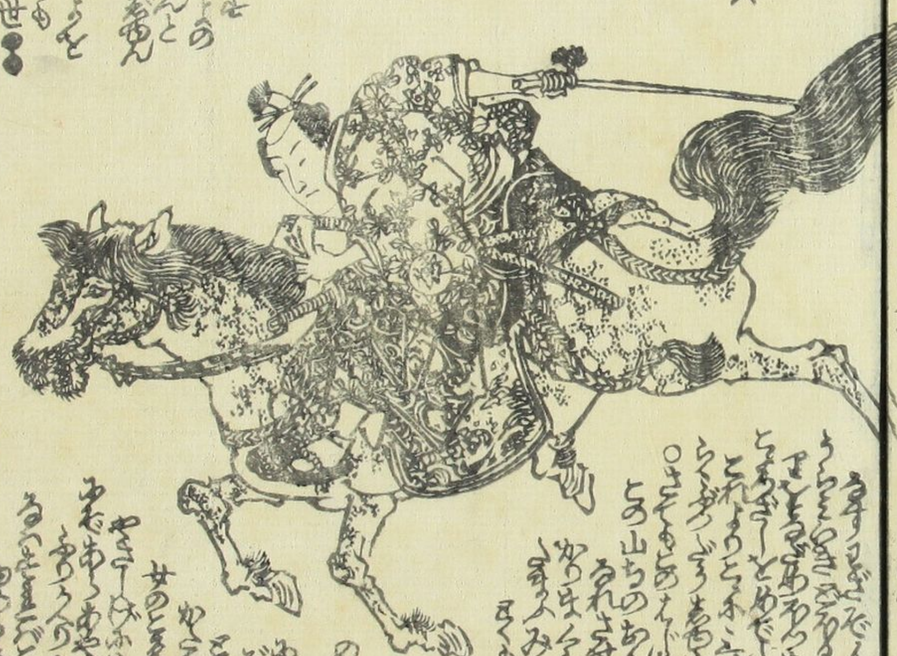
保

花山
元まち

成
懐

司





華

武

[illegible]

娘庭訓金鶏　山東庵京山作　初編二編三編　梅蝶樓國貞画

おくみ総次郎琴聲美人録　同　十四編十五編十六編　立川齋國郷画

夢想兵衛勘客枕　笠亭仙果作　五編　大尾　一勇齋國芳画

新増補西國奇談　爲永春水作　三編四編五編　歌川國貞画

お七吉三松梅竹取物語　樂亭西馬作　初編二編　歌川國貞画

根源實紫　笠亭仙果作　十一編十二編　歌川國貞画

花兄弟陸奥名所　同　初編　同　同

東都地本繪草紙團扇問屋　芝神明前三島町角　佐野屋喜兵衛板

以下全て

白紙